

今月の谷口雅春先生のお言葉

# わが子は神秘ないのちに生かされている

この世界は神秘に満ちている

神秘を知らない人間ほど始末におえないものはない。そんな人間にとつてはどこにも不思議と称すべきものはないのであって、いたるところ到る処に満ちているのは、ただ「当り前」の興味のないガラクタ現象ばかりである。彼は何を見ても不思議がらない。何もかも神秘ではない。だから何を見ても何のインスピレーションもないのである。林檎りんごの落ちるのは当り前だし、湯気が鉄瓶てつびんの蓋ふたをもち上げるのも当り前だし、植物せいちようが生長するのも当り前だし、

人間が生きているのも当り前である。何故なぜ生物は生長するのか、何故それは生きているのか、何故血液は循環するのか、何故心臓は動くのか——あなたがたは、かくして世界の到るところに満ちているところのこれらの事柄ことばに驚異きょういを感じたことはないであろうか。

（新編『生命の真相』第22巻115～116頁）

神秘におどろく心

「あなたが生きているのは心臓が動いているからです。心臓がとまれば死にます」などという医学おしえの教でこの不

可思議な生命を当り前の現象だとは思うな。医学には心臓が動く事は判わかつていても心臓が何故動なくかは判ならないのだ。生命がどこから来るかは判ならないのだ。まだまだ当り前だというには早いのだ。好よい加減かげんなところでビツクリすることを止やめるな。

林檎りんごが落ちたのを見て、その不思議きまげんさに驚異きょういしたニュートンや、湯気が鉄瓶てつびんの蓋ふたをうごかす力に驚異きょういしたジェームズ・ワットは、科学界の大天才となったのである。生老病死しょうろうびじょうしの四苦しきくを見てビツクリした釈迦しやくかは一大宗教的天才となったのである。自分に肉親の父親がないことを知ってビツクリしたイエスは、天に父を発見してこれも宗教的天才となったのである。自然や人間の美を見てビツクリした多くの人々は、ラファエルとなり、ミケランジェロとなり、ミレーとなり、ロダンとなり、シェイクスピアとなった。

〔新編『生命の真相』第22卷117～118頁〕

子供に「神秘がる心」を教えよう

幼時ようじより子供の「神秘がる心」を押し消さないようにすることだ。神秘なことを神秘として教えよ。深く考えれば実に神秘であるところの現象を、当り前の茶飯事さはんじだとして、見のがしてしまうような習慣をつけてはならぬ。

人間を心臓というモーターで動く機械だと教えてはならぬ。草木そうもくを唯ただの毛細管現象もうさいかんで生長せいちようする機械だと教えてはならぬ。神仏を偶像であると教えてはならぬ。あらゆる物にやどる生命の神秘を教えよ。神秘に驚異きょういし、生命を崇敬すうけいし、その生命の神秘に一步でも近づぐことを名譽めいよと思い、生命を合掌がっしょう礼拝らいはいするように子供を教えよ。

嗚呼ああ！ 生命の神秘を驚異し尊ぶ心——隣人愛も、生物愛護けいごも、敬虔けいけんなる宗教心も、画期的な科学的發明も、偉大なる哲学も、妙たえなる芸術も、それから実業界の素晴らしき成功さえも、皆みなこの生命の神秘を礼拝する心によって得られるのだ。〔新編『生命の真相』第22卷121～122頁〕

人間には「神の子」という本当のすがたがある

人間には仮の相と本当の相とがあるのです。仮の相というのは(中略)、親が心で縛っているとそれに反抗するために、或は操行がわるくなったり、成績が悪くなったりして、周囲の心の反影として出て来る、これが仮の相でありまして、本来その子の操行がわるいのも学業の成績が悪いのでもないのであります。人間の本来の相、本当の相は神の子でありますから、「本来この子は善い」と、子供の実相、その本当の相を見て、それを拝み出すようにしますと——拝むといつても、強ち掌を合わさなくても無論好いのですけれども——心で子供を拝む——「うちの子供は本当に神の子であって立派な子である。放っておいても大丈夫である。決して悪くなるようなこととはないのである」と子供を信じて心で拝むのであります。

(新編『生命の實相』第47卷56頁)

神の生命を自覚するとき、それが現れる

人を見るのにその外見をもってしてはならない。人間の実相を見ると云うのは、人間の肉体や衣服は仮りの相であって、「人そのもの」ではないと云うことを知り、その奥に宿っているところの「神の生命」(仏教的に謂えば「仏性」)を観ると云うことなのである。何人も神の自己顕現として、自己の内に「神」を蔵しているのである。これこそが「真の人間」であるのである。そしてその「内部の自己」が「神」であることを自覚し、それを尊敬し、その如く生きようと努力するとき、自分の性格も環境も健康も改まりはじめるのである。そして他の人の「内部の自己」が矢張り「神」であり、完全であることを心で一心に観て、それを尊敬し合掌礼拝するようになるとき、その「他の人」が礼拝されるに相応わしい立派な人間となって顕れてくる。

(新装新版『真理』第2卷142頁)